

# 萬葉集の天平十年

——石上乙麻呂、元興寺僧、豊嶋采女——

影山尚之

はじめに

一 天平十年の萬葉集

二 石上乙麻呂関係歌群

三 各歌の展開と乙麻呂の人物像

四 人に知らえず

むすび

萬葉集「石上乙麻呂関係歌群」(巻六・一〇一九～一〇二三)は、作品の外形がすでに異様で、配列位置にも不審が抱かれてきたが、そこに遺漏や齟齬を見るべきではなくて、巻六の意図の投影と把握するのがよい。同巻天平十年に配される「元興寺僧自嘆歌」(一〇一八)、「右大臣橘家宴歌」(一〇二三～一〇二七)とあわせ観察するときには、ある種の歴史認識を析出することが可能であり、当該歌群はそのもとに巧みにデザインされていると受け取ることができる。

## はじめに

天平と平成との干支の巡り合わせが同じであることはよく知られている。そこでいま、平成十年（一九九八）をすこしだけ思い出してみたい。試みに平成十年十月五日付朝刊を見ると、紙面は大きく「和歌山毒入りカレー事件」を取り上げている。銀行淘汰の文字が各頁に躍り、野球は横浜が首位で最下位阪神、夜九時から「失楽園」の放送があつて、当時の総理は故小渕恵三氏だった。十月のニュースではないが、奈良県天理市の黒塚古墳で三十三面の三角縁神獣鏡が発見されたのもこの年である。

五十歳を過ぎた者にはどれも記憶に新しい出来事ながら、慌ただしい暮らしの中では思い出すさえ稀なことばかりでもある。ちなみにこの年の流行語大賞は「ハマの大魔神」と「だっちゅうーの」、「今年の漢字」は「毒」であつた。

## 一 天平十年の萬葉集

土屋文明『萬葉集年表』（以下『年表』と略称）は天平十年に属する作歌を次のように掲出する。行論の便宜上、題詞下に①から⑥の符号を付しておく。

御在西池邊肆宴歌一首——①

八一五〇 ×池の辺の松の末葉に降る雪は五百重降り敷け明

日さへも見む

右一首作者未詳 但堅子阿倍朝臣蟲麻呂  
傳誦之

十年七月七日之夜獨仰天漢聊述懷一首

一七三〇 織女し舟乗りすらしまそ鏡清き月夜に雲立ち渡る——②

右一首大伴宿禰家持作

右大臣橘家宴歌七首——③

八一五七 雲の上に鳴くなる雁の遠けども君に逢はむとたとほり来つ

八一五五 雲の上に鳴きつる雁の寒きなへ萩の下葉はもみちぬるかも

右二首

八一五六 この岡に雄鹿踏み起こしうかねらひかかもすらく君故にこそ

右一首長門守巨曾倍朝臣津嶋

八一五七 秋の野の尾花が末を押しなべて来しくも著く逢へる君かも

八一五八 今朝鳴きて行きし雁が音寒みかもこの野の浅茅色付きにける

右二首阿倍朝臣蟲麻呂

八一五九 朝戸開けて物思ふ時に白露の置ける秋萩見えつつ

もとな

八一五〇  
さ雄鹿の来立ち鳴く野の秋萩は露霜負ひて散りに  
しものを

右二首文忌寸馬養

天平十年戊寅秋八月廿日

秋八月廿日宴右大臣橘家歌四首 ——— ④

六一〇四  
長門なる沖つ借島奥まへて我が思ふ君は千歳にも  
かも

右一首長門守巨曾倍對馬朝臣

六一〇五  
奥まへて我を思へる我が背子は千歳五百歳ありこ  
せぬかも

右一首右大臣和歌

六一〇六  
×ももしきの大宮人は今日もかも暇をなみと里に  
出でざらむ

右一首右大臣傳云 故豊嶋采女歌

六一〇七  
×橘の本に道踏む八ちまたに物をそ思ふ人に知ら  
えず

右一首右大辨高橋安麻呂卿語云 故豊嶋

采女之作也 但或本云 三方沙弥戀妻苑

臣作歌 然則豊嶋采女當時當所口吟此歌

歟

十年戊寅元興寺之僧自嘆歌一首 ——— ⑤

六一〇八  
白玉は人に知らえず知らずともよし知らずとも我  
し知れらば知らずともよし

右一首或云 元興寺之僧獨覺多智 未有

顯聞 衆諸狎侮 因此僧作此歌自嘆身才  
也

橘朝臣奈良麻呂結集宴歌十一首 ——— ⑥

六一一  
手折らずて散りなば惜しと我が思ひし秋の黄葉を  
かざしつるかも

六一二  
めづらしき人に見せむともみち葉を手折りそ我が  
来し雨の降らくに

右二首橘朝臣奈良麻呂

六一三  
もみち葉を散らすしぐれに濡れて来て君が黄葉を  
かざしつるかも

右一首久米女王

六一四  
めづらしと我が思ふ君は秋山の初もみち葉に似て  
こそありけれ

右一首長忌寸娘

六一五  
奈良山の峰のもみち葉取れば散るしぐれの雨し間  
なく降るらし

右一首内舍人縣犬養宿祢吉男

六一六  
もみち葉を散らまく惜しみ手折り来て今夜かざし  
つ何か思はむ

右一首縣犬養宿祢持男

八一五七 あしひきの山のもみち葉今夜もか浮かび行くらむ

山川の瀬に

右一首大伴宿祢書持

八一五八 奈良山をにほはす黄葉手折り来て今夜かざしつ散

らば散るとも

右一首三手代人名

八一五九 露霜にあへる黄葉を手折り来て妹はかざしつ後は

散るとも

右一首秦許遍麻呂

八一六〇 十月しぐれにあへるもみち葉の吹かば散りなむ風

のまにまに

右一首大伴宿祢池主

八一六一 もみち葉の過ぎまく惜しみ思ふどち遊ぶ今夜は明

けずもあらぬか

右一首内舍人大伴宿祢家持

以前冬十月十七日集於右大臣橘卿之舊宅

宴飲也<sup>1)</sup>

『年表』が①を天平十年に帰属させたのは『萬葉代匠

記』が続日本紀天平十年七月癸酉条の肆宴記事「晩頭軼御西池宮」を引用したことに拠るが、「その時梅の詩を召さ

れたりと伝ふれど、この歌冬の歌なればその時の歌にはあらず、古歌を誦せるとしても、此の時なりや否や不明なり」と土屋自ら書き付けるように、作歌年次不明としておくのが穩当である。③と④はともに八月二十日橘諸兄宅における宴席詠を卷六と卷八に分載したもの、⑥は十月十七日に橘諸兄の奈良の旧宅で開かれた宴席の歌々であり、この年に諸兄関係歌の占める割合が異常に高いことは目を引く。続日本紀は天平十年正月壬午条に「是日、授大納言從三位橘宿禰諸兄正三位、拜右大臣」の記事を留めるので、八月・十月に連続する宴にはこの年の諸兄の榮達に祝福をおくる意味が添えられていたのかもしれない。ただし、卷六に編集された四首宴席詠の意義についてはすこし考えるべき点がある（後述）。

『年表』の天平十年は右のとおりだが、萬葉集卷六は天平十年作歌として⑤と④との間に石上乙麻呂関係歌を配列する。念のため卷六における同年の全体を俯瞰しておこう。ここでの本文引用は塙書房刊『補訂版萬葉集本文篇』を用いる。

十年戊寅元興寺之僧自嘆歌一首——⑤

白珠者 人尔不知所知 不知友縦 雖不知 吾之知有者

不知友任意（6・1—18）

右一首或云 元興寺之僧獨覺多智 未有蹟聞

衆諸狎侮 因此僧作此歌自嘆身才也

石上乙麻呂卿配土佐國之時歌三首 并短歌

石上 振乃尊者 弱女乃 或尔縁而 馬自物 繩取附

肉自物 弓笑圍而 王 命恐 天離 夷部尔退 古

衣 又打山從 還来奴香聞 (6・1019)

王 命恐見 刺並 國尔出座 愛耶 吾背乃公矣 繫

卷裳 湯々石恐石 住吉乃 荒人神 船舳尔 牛吐賜

付賜將 嶋之埼前 依賜將 磯乃埼前 荒浪 風尔

不令遇 莫管見 身疾不有 急 令變賜根 本國部尔

(6・1020、1021)

父公尔 吾者真名子叙 妣刀自尔 吾者愛兒叙 参昇

八十氏人乃 手向為 恐乃坂尔 幣奉 吾者叙追

遠杵土左道矣 (6・1022)

反歌一首

大埼乃 神之小濱者 雖小 百船純毛 過迹云莫國

(6・1023)

秋八月廿日宴右大臣橘家歌四首 —— ④

長門有 奥津借嶋 奥真経而 吾念君者 千歳尔母我

毛 (6・1024)

右一首長門守巨曾倍對馬朝臣

奥真経而 吾乎念流 吾背子者 千年五百歳 有巨勢

奴香聞 (6・1025)

右一首右大臣和歌

百磯城乃 大宮人者 今日毛鴨 暇无跡 里尔不出將

有 (6・1026)

右一首右大臣傳云 故豊嶋采女歌

橘 本尔道履 八衢尔 物乎曾念 人尔不知所知

(6・1027)

右一首右大辨高橋安麻呂卿語云 故豊嶋采女

之作也 但或本云 三方沙弥戀妻苑臣作歌

然則豊嶋采女當時當所口吟此歌歟

『年表』は一〇一九〜一〇二三歌を天平十年から除外し

て天平十一年に収載していた。続日本紀天平十一年三月庚

申条に「石上朝臣乙麻呂坐軒久米連若壳、配流土左國。若

壳配下総國焉」とあるのがその根拠である。萬葉集と正史

との間に齟齬があることは明白で、澤瀉久孝『萬葉集注

釈』は右記事に触れて「ここに天平十年の條に収められて

ゐるのは編者の誤か」といい、吉井巖氏『萬葉集全注卷第

六』は、「事件が十年に起つたといふ強い印象が編者にあ

つたからだと思はれる」とした五味智英の言を引きつつも

「編者の思い違いによるものである事は動かない」と断じ

る。その判断は、卷六全体を貫く原理として「歴史的関

心」を見ようとしていることにかかわっている。

重要なことは、天平元年、七年、十三、十四年の作歌

を欠きながら、巻六はともかく天平十六年甲申まで、忠実に年月を追って作歌を並べようと努力していることである。私はそこに執拗な歴史的関心をみる。<sup>③</sup>

「忠実」な配列方針を強調するときには、なるほど石上乙麻呂関係歌の処置は誤認と見なすしかないのだろう。渡瀬昌忠氏は久米若売の服喪（亡夫宇合に対する）を勘案して乙麻呂との私通事件が起きた時期を天平十年八月五日以後と推算したが、一連の歌の内容が配流後の乙麻呂を描いたものである以上、どう辻褃を合わそうとしても萬葉集の配列を正史と整合させることはむずかしい。

「天武・持統系の最後の男帝である聖武天皇治世を記念しようとして編まれた雑歌集」が巻六であるとする吉井氏の認定は、こんにち広く承認されている。「聖武朝の開始を高らかに語る」養老七年吉野行幸歌にはじまり、年代明記歌の最後が「聖武天皇唯一の皇子」安積皇子の薨ずる天平十六年であること、さらにその後部に年代不明歌を続ける巻六の組織の意味を次のように説く。

安積皇子薨去の天平十六年は、事実上の天武・持統系皇統の断絶を決定した年であった。同時に、聖武天皇が実質的治世を放棄するに至る契機となった、聖武朝治世の輝きの消えゆく年でもあった。…（中略）…思うに、聖武天皇治世がまだその余命をつづけながら、

実際にはその幕をおろしたという歴史認識、それが、年代明示の作を天平十六年において打ち切り、その後に、年代不明のままで、巻頭に対応する巻尾の儀礼歌群を置いて、巻六を完成させるという、終わりの確定しない、意図的な無時間の形式をとらせたのではないかと思うのである。<sup>⑤</sup>

巻六が「歴史」を志向していることは、年次を追って編む体裁をとらえるだけでも明らかである。吉井氏のいう「歴史認識」「無時間」を引き受けつつ神野志隆光氏は、

巻一、二のもとにつくってきた「歴史」——神としての天皇たちの歴史——はここで画されるのである。巻六は、巻頭も、巻末部も、この巻が巻一、二とつながって…（中略）…ひとつの「歴史」「世界をつくるもの」として見ることをもとめていると見るべきだ。<sup>⑥</sup>と述べる。卓抜な洞察としてこれら一連の発言を受け止めたい。<sup>⑦</sup>

ただしここで弁えておかねばなければならないことは、神野志論が「歴史」「世界をつくる」と論定した意義である。神野志氏自身が念を押すかのように『万葉集』は、独自なみずからの「歴史」を構築する」と述べるのとおりだ。つまり巻六の「歴史」への志向は、歴史的時間軸に沿って歌を並べることで史実の活写を図っているのではなく、歌

によつて（歌の配列によつて）歴史を創り出そうとしてゐるのである。

たとえば、天平五年の位置に次のような歌々が並ぶ事実を注視しよう。

五年癸酉超草香山時神社忌寸老麻呂作歌二首

（6・九七六く九七七）

山上臣憶良沈痾之時歌一首（6・九七八）

大伴坂上郎女与姪家持從佐保還歸西宅歌一首

（6・九七九）

安倍朝臣蟲麻呂月歌一首（6・九八〇）

大伴坂上郎女月歌三首（6・九八一く九八三）

豊前國娘子月歌一首 娘子字曰大宅姓氏未詳也

（6・九八四）

湯原王月歌二首（6・九八五く九八六）

藤原八束朝臣月歌一首（6・九八七）

市原王宴禱父安貴王歌一首（6・九八八）

湯原王打酒歌一首（6・九八九）

紀朝臣鹿人跡見茂岡之松樹歌一首（6・九九〇）

同鹿人至泊瀬河邊作歌一首（6・九九一）

大伴坂上郎女詠元興寺之里歌一首（6・九九二）

同坂上郎女初月歌一首（6・九九三）

大伴宿祢家持初月歌一首（6・九九四）

大伴坂上郎女宴親族歌一首（6・九九五）

右は、常識的にみて天平五年作であることの強固な規定を強く受けるとは考えにくい歌の連続である。はじめの二件はともかく、破線を施した事例は王族や大伴氏・紀氏の親族間における宴席詠であり、宴の開催時が実際に天平五年であつたのだとしても、先掲C・Dのように月日までを記録しているわけではないから、その年その月であることがさほど重大な意味を帯びたとは思われず、「月歌」と題する歌々（傍線部）に至つてはなおさら天平五年であることの積極的な意義や根拠を見出しにくい。いわば、どの年の詠であつても差し支えないものばかりである。これらは、吉井氏が用いたのとは違う意味で——特定の時間に制限されていないという意味で——「無時間」なのであつて、それゆえ「史実」の構築に機能しえない歌であると見なされる。しかしながら、こうした詠歌の連続がある種の「歴史」を語つてゐるのだと予測してあえてその内実を問うとしたら、天平五年には平城京内の王族貴族らがそれぞれに邸宅で月を愛で酒をたしなむ穏やかな日常が展開していること、あまねく風流が浸透し奈良の都の理想的繁栄が実現しているという証言、にほかならないであろう。巻六が描き出す「歴史」にかかる側面のあることを見逃してはなるまい。

天平五年に限っていえば、この証言はあるいは次のような社会情勢と無関係でないのかもしれない。

己亥、此夏陽旱、百姓不佃。

(続日本紀天平四年六月条)

丙寅、地震。(同・天平四年七月条)

丁酉、大風雨。壞百姓廬舍及処処仏寺堂塔。是夏、少雨。秋稼不稔。(同・天平四年八月条)

辛卯、地震。(同・天平四年十二月条)

丙寅、芳野監、讃岐・淡路等国、去年不登。百姓飢饉。

(同・天平五年正月条)

乙亥、紀伊国旱損。(同・天平五年二月条)

甲申、大倭・河内五穀不登、百姓飢饉。

(同・天平五年二月条)

戊子、諸王飢乏者二百十三人、召入於殿前、各賜米塩。

(同・天平五年閏三月条)

任意に抜き出した記事にすぎないが、こうした記録が語る現実と、月を愛で酒を嗜む歌々が曇みかけられるありようとの間に露わになる矛盾・齟齬にこそ、萬葉集を貫く思想性——歴史認識——を看取するべきなのではないか。そうであるとすれば、翌天平六年冒頭の一首、

六年甲戌海犬養宿祢岡麻呂應 詔歌一首

御民我生ける驗あり天地の榮ゆる時にあへらく思へば

が描き出す皇都の絶頂期は、まさに前年の和楽と風流の蓄積がもたらした必然的帰結であるというふうに巻六のねらいを見届ければよいのであろう。

天平十年に話題を戻すなら、元興寺の僧の「自嘆歌」も同じく時間に規定されることのない詠である。後述のごとくこの一首が天平十年作であるところに積極的意義を探る試みがあるけれども、おそらくそれは当たるまい。僧侶の憤懣もしくは忸怩たる内面の吐露が、ある限定された年月日に結合するとはとうてい思えない。そういう詠を配列する箇所に、石上乙麻呂関係歌が隣接している事実を重く見たい。

## 二 石上乙麻呂関係歌群

石上乙麻呂卿配土左國之時歌三首 并短歌

A 石上 布留の尊は たわやめの 惑ひに因りて 馬じもの 縄取り付け 鹿じもの 弓矢囲みて 大君の命恐み 天離る 夷辺に罷る 古衣 真土山より 帰り来ぬかも (6・10一九)

B 大君の 命恐み さし並ぶ 国に出でます はしきやし 我が背の君を かけまくも ゆゆし恐し 住吉の現人神 船舶に うしはきたまひ 着きたまはむ 島



の崎々 寄りたまはむ 磯の崎々 荒き波 風にあは  
せず 障みなく 病あらせず 速けく 帰したまはね  
本の国辺に (6・一〇二〇、一〇二一)

C 父君に 我は愛子ぞ 母刀自に 我は愛子ぞ 参る上  
る 八十氏人の 手向する 恐の坂に 幣奉り 我は  
ぞ追へる 遠き土左道を (6・一〇二二)

#### 反歌一首

D 大崎の神の小浜は狭けども百舟人も過ぐといはなくに  
(6・一〇二三)

各々が石上乙麻呂の配流にかかわる詠作であることは疑  
いないが、さまざまな異例と不審を抱えており、もとより  
巻六内部にかような違和感を抱かせる歌群はほかになく、  
扱いにくい作品と言わざるをえない。一覧するだけですぐ  
さま次のような不審点が見出される。

A 作者明記の巻にありながら各歌の作者を記さない。

例外的に作者不明歌を収録する場合は作者未詳注記  
を施すのがふつうだが、それも無い。

イ 「并短歌」と題詞下に記すのにA・Bには短歌(反  
歌)を伴わない。三首の長歌に一首の反歌が続くとい  
う状態はほかに見いだしがたい。

Aに関しては、B歌の左に「右二首、石上卿妻作」、D歌  
の左に「右二首、石上卿作」を補入する『萬葉集古義』の

処置や、すべてを乙麻呂作と解する『萬葉集全註釈』の判  
断もあつたが、むろんいずれにも従えない。伊藤博氏が、  
すなおに読めば、Aが乙麻呂に同情した誰かわからぬ  
第三者、Bが乙麻呂の妻、Cが乙麻呂自身の作である  
ことは、誰の目にもはつきりしよう。<sup>8)</sup>

と述べたように少なくとも三者の主体がこの歌群上に実現  
していることは確実だ。「乙麻呂の妻」「乙麻呂自身」とい  
うのがあくまでも設定としてのそれらであることは言うま  
でもない。

かかる歪つを抱えた歌群は必ず複雑な形成過程を予感さ  
せる。たとえば小島憲之氏はこれらの歌に「口頭要素」  
を指摘し、「歌ひ手と聴衆とによつて生まれた歌謡」であ  
るとして「編纂以前に流動してゐた」ものと推測、さらに  
反歌が編纂時点に付加されたものであるとした。

乙麻呂配流事件をそれぞれ歌つたものを一箇處に集め、  
最後に机上に於て述作として反歌を加へたもの、即ち  
戲曲的に配列したものかと推測される。三首の長歌の  
原姿は、一般民衆を中心とする歌謡的な要素をもつも  
のと思はれる。<sup>9)</sup>

伊藤博氏もまた、歌群が第三者的姿勢(A)から当事者的  
姿勢(B・D)に転換しているところをとらえ「歌語り」  
の術語をもつてこれらを説く。一方で中西進氏は歌謡的性

格を否定し、「この一連は同一人の手になるものと考えなければならぬ」「一連を三段に分つて同一人が作つてゐる」と断定、主体の異なる三つの長歌という「複式構成」は中国の情詩に倣つたものであるとする。すればその作者は逸名の文人ということに落ち着こう。また、渡瀬昌忠氏は流下型「四人構成」の原理を当該歌群にも指摘して、

残されて待つ親属・故旧と、配されて行く流人の乙麻呂とが、互いに歌いかわした別れの歌として作られたものであつた。それは、乙麻呂自身の作でもなければ、自然発生的に歌われた歌謡群でもない。衝撃の乙麻呂配流事件、権力に引かれ行く者と残される親故との嘆きを題材とする、四人構成の座による、あるいは四人構成の座のための、創作歌群であつた。<sup>11)</sup>

と述べる。さらに村瀬憲夫氏は用語・用字の特徴に着目して考察し、A・B歌が笠金村もしくはその周辺の歌びによつて謡いつがれた歌、C・D歌はそれを承けて田辺福麻呂が作り加えた歌と結論、一連は福麻呂歌集に収録されていたものと推定している。<sup>12)</sup>

いずれも説得的に構築されたこれらの議論を止揚することは困難である。むしろ、右に想定されている過程がさらに複合的に作用しているのだらうと思われもする。もつとも当該歌群は、ただちにそうした次元の論議に向かうこと

を実は許さない。

よく知られているとおり当該作品に關して現在行われている本文・訓は高度な校訂を経たものであり、それゆえその信頼性は必ずしも堅固ではない。細かいことはおくとしても、古写本の多くはBの冒頭部分をAに對する反歌と解し、たとえば西本願寺本は、

王<sup>オホミチノ</sup> 命<sup>ミコトノ</sup> 恐<sup>オソシ</sup> 見<sup>ミ</sup> 刺<sup>サシ</sup> 並<sup>ナミ</sup> 之<sup>シ</sup> 國<sup>クニ</sup> 爾<sup>ニ</sup> 出<sup>イデ</sup> 座<sup>マスバ</sup> 耶<sup>ヤ</sup> 吾<sup>ワカ</sup> 背<sup>セ</sup> 乃<sup>ノ</sup> 公<sup>キミ</sup> 矣<sup>ヤ</sup>

と訓読した。右を「かけまくも」以下と一続きの長歌と理解したのは『萬葉集略解』所引「宣長云或人説」が最初であるらしく、

宣長云或人の説に、此王命恐云々は次なる長歌の初也、さて出座の下文字脱たり、國爾出座、○○○耶○、吾背乃君矣、繫卷裳、云々とつゞく也、卷十九長歌に虚見津云々和我勢能君乎懸麻久乃由々志恐伎云々と有を合せ見て知べきよしへり、此説いとよし、

として以後、この判断が踏襲される次第となつた。ただし、「耶」をハシキヤシの一部と推定した慧眼には敬意を表するとしても、現在ではこの種の誤字説を恣意的として退けるのがふつうである。ところが、澤瀉『注釈』に、

このハシキヤシの原文は「愛耶」の二字で、「愛」の一字が落ちたのではなからうか。

と部分修正された見解が意外にも支持を集め、今日すでに

通説に近い位置を占めるに至る。しかしその校訂の危うさは、岩波旧大系ほか『萬葉集古義』所引吉田正準説「並之下に土左の二字を脱せしなるべし」を評価して採用した、

大君の 命恐み さし並ぶ 土佐の国に 出でますや  
我が背の君を

の復元本文と優劣の差がない程度だと認識しなければならぬ。「國尔出座耶」をそのままに「クニニイデマスヤ」と訓んでおくか、あるいは、七音句が連続する不審を重くみるなら一句分の脱落を想定する（諸本に存在しない文字を補うのでなく）に留めるのが穏当な態度ではないか。

いずれにせよ『略解』の提言を受け入れたことで、当該作品は前掲イの異例を引き受けざるをえないことになった。形成過程がいかにあつたとしても、三首の長歌に対して反歌がD歌一首のみという、題詞の情報から明らかに乖離した状態を合理的に解く手段は見当たらない。

右以外にも、すでに指摘されているように表現上の顕著な類似が見られる「天平五年贈入唐使歌」、

そらみつ 大和の国 あをによし 奈良の都ゆ おし  
照る 難波に下り 住吉の 三津に船乗り 直渡り  
日の入る国に 遣はさる 我が背の君を かけまくの  
ゆゆし恐き 住吉の 我が大御神 船の舳に 領きい

まし 船艫に み立たしまして さし寄らむ 磯の  
崎々 漕ぎ泊てむ 泊まり泊まりに 荒き風 波にあ  
はせず 平けく 率て帰りませ もとの朝廷に

(19・四二四五)

がB歌の成立にどのように関与するのか、あるいは、D歌「大崎の神の小浜」を現・和歌山県海南市下津町大崎と見るか和歌山市加太町に求めるかという地理上の問題<sup>13</sup>、また、渡瀬氏前掲論が指摘するように乙麻呂の父・石上麻呂は早く他界しているにもかかわらずD歌で「父君に我は愛子ぞ」とうたう意図がどこにあるのか、など困難な問題が重層する。当該作品群の表現解析を正攻法的に行おうとしてもそのための条件が整わないのである。小稿が天平十年に配列された詠歌群の俯瞰に逃げるのは右記の事情による。

### 三 各歌の展開と乙麻呂の人物像

かように不安定な要素を含みながらも、各歌の内容はひとまず次のように把握される。前掲渡瀬論に倣い、地理（交通）についても付記しておく。

表現内容		地理（交通）
A	時の人による、罪人・乙麻呂への同情	真土山（陸路）
B	妻・家人による、乙麻呂の無事の帰還への切実な願い	さし並ぶ国（海路）
C	被配流者自身による、土左下向時の内面（父母への思い）	恐の坂・土左道（陸路）
D	被配流者自身による、本州最終地点における感慨	大崎の神の小浜（海路）

前記した「大崎の神の小浜」に加えてCの「恐の坂」も所在地不明ゆえ確言できないが、A歌に「真土山」がうたわれるところから推測するに、四首は都から土左への行程の推移——すなわち時間の推移——に沿って展開しているように映る。「馬じもの・鹿じもの」は都を退出してゆく時点の乙麻呂の描写であり、B歌はすでに海路に身を置いていることになって、C歌では目的地土左が旅人の認識に上る地点に達し、D歌はいよいよ紀淡海峡に漕ぎ出してゆく、という次第だ。陸路をうたうものと海路をうたうものとがきれいに向かい合って見える点は、前掲渡瀬論文の指摘するところである。

ただし、右のように相互の連繫を予測させる一方で、各歌の叙述自体に緊密な交点が見いだされるわけではない。

主体がいちいち入れ替わるのだからそれは当然でもあろうが、A歌が配流の原因として明言する「たわやめの惑ひ」はB歌に引き取られず、単に「大君の命恐み」とあたかも遠距離に及ぶ官旅のごとくにうたわれ、C歌は乙麻呂を案じる「時の人」「妻・家人」のいづれにも心を向かわせることなく「父母」だけを思うというふうには、各歌はみごとにすれ違っているのであり、先立つ詠を承けてそれぞれが構想されているとは考えにくい。D歌にしても『萬葉集私注』が「或は乙麿のことに關係ない湊の歌が反歌として取り用ゐられたものであらうか」と疑ったように、仮に「反歌一首」の題詞を持たなければC歌との連絡が不明になるほどこだ。前掲小島論文が「乙麻呂配流事件をそれぞれ歌つたもの（傍点影山）」と評したのはこうしたありようをとらえてのことだろう。要するに相互の対話が成立していないのである。

こうして各歌がすれ違いながら、しかしなお結果的に全体はひとつの焦点へと収斂しているとも言える。収斂する一点は、とりもなおさず被配流者乙麻呂の高雅な人格である。すなわち、A・B歌は私通により罪人となった乙麻呂をいつさい非難・批判することなく、過酷な処遇を受ける姿に限りない同情のまなざしを寄せ、安否を気遣って、早期の帰還を衷心より祈っている。「住吉の現人神」の加

護を願うのは家人の切実な心理でもあろうが、裏返せば、

乙麻呂が住吉大神の加護を受けるに足る人物であることを証している。A歌冒頭「石上布留の尊」の表現に関して「たはむれて名づけた」（澤瀉『注釈』）、「古い人間、駄目な人間の意の貶稱」（土屋『私注』）などと解して「哀れみ」から「揶揄」に近寄る含みを指摘する向きもあるが（伊藤博氏『釈注』など）、吉井氏『全注』が詳細に説いたように、そこに乙麻呂を蔑む意識は介在しない。

「石上布留の尊」とつづく表現に、万葉人はまず石上振神宮や石上振之神櫓を感じとるはずであり、その神宮や神櫓にゆかりの深い石上氏を、石上布留社の殿様と呼んだままで、そこには乙麻呂が名門の出自であることの主張はあっても、蔑視の意の入りこむ余地はないと考えられる。

「たわやめの惑ひに因りて」の叙述について揶揄の含みを直観したくなるのは現代人に共通の嗅覚かもしれないが、歌中に「尊」を用いるのは題詞「卿」字と響き合って乙麻呂への敬意が維持され、かように尊ばれるべき人でありながら「馬じもの」「鹿じもの」の扱いを受ける不当がAでは主張されている。また、乙麻呂自身の立場に立つC・D歌においては、同じく流罪に断ぜられた中臣宅守の詠に、

立ち反り泣けども我は験なみ思ひわぶれて寝る夜しそ

多き（15・三七五九）

世間の常の理かくさまになり来にけらしすゑし種から

（15・三七六〇）

の反省・後悔が目立つのとは異なり、父母に対する「孝」の倫理観を前面に立てて肅々と配地に下る姿勢をうたう。

「吾者叙追」について小学館新編全集『萬葉集』に「このオフは目的地を目ざして真つ直ぐに進むこと」と注するとおりであれば、未練や躊躇いを捨てて配地を目指す乙麻呂の潔さがこの語に凝縮していると見られよう。A・B歌の同情を受け止めないことがかえって冷厳な乙麻呂の姿勢を浮かびあがらせるともいえる。D歌でも悲嘆や悔恨を口にするかわりに、自らの運命を冷静かつ客観的に受け入れる器量を示す。

『懷風藻』は乙麻呂について次のような伝を載せる。

石上中納言は、左大臣の第三子なり。地望清華、人才穎秀。雍容間雅、甚だ風儀に善し。志を典墳に昂めりと雖も、亦頗る篇翰を愛む。嘗て朝禮有りて、南荒に飄寓す。淵に臨み沢に吟びて、心を文藻に写す。遂に銜悲藻両卷有り、今世に伝はる。天平年中に、詔して入唐使を簡ばしめたまふ。元来此の挙其の人を得ることに難し。時に朝堂に選ぶに、公が右に出づるもの無し。遂に大使に拝さる。衆僉は悦び服ふ。時に推さゆるこ

と、皆此の類なり。然すがに遂に往かずありき。其の後從三位中納言を授けらゆ。台位に登りてより、風采日に新し。芳猷遠しと雖も、遺列蕩然なり。時に年若干。

秀才や容貌への賛辞は伝記の常套であるとしても、「南荒」に「飄寓」する境遇のなかで綴った詩文への称賛、入唐大使選出時の「衆僉悦服」はこの人の資質と人望の高さに對する的確な顕彰であろう。

容易に気づかれるのは、右がAとDから抽出される情報と何ら矛盾のない点である。むしろ乙麻呂に對するこうした世論がAとDに凝縮したかと思わせるほどだ。その意味においては小島が「戲曲的」と説き、伊藤が「歌語り」と説いたところが首肯されてよい。吉井氏『全注』にも次のように評している。

さて、この配流事件は、急速に昇進した高官の恋と配流という、耳目を驚かせた事件であつた。従つて、宮廷内外の関心も高く、以上のような歌謡的作品が作られるに至つたのであろう。

事件の真相や背後事情はともかくとして、乙麻呂配流事件は、卓越した才覚と魅力ある人間性を備えながら罪を負うことを余儀なくされた不遇な官僚の身の上、ということである。当時の人々に迎えられるにちがいない。この歌群は、伝誦

に由来するにせよ文人の手になる創作にせよ、AとDは乙麻呂の身に出来した出来事に對する世間的評価を雄弁に語っているという点で完結した作品たりえていふと考へる。あえて主観を追加するなら、全体に漂う歌謡性はむしろ意図的に持ち込まれた装置であり、いちいちがすれ違ふように装いつつも統一的主題の具現化が志向されているのではない。錯綜した印象は出来した事件が投げかける波紋の大きさに応じているのだと受け取れば、実は周到に計算された歌群であるという評価を与えてよいのかもしれない。いづれにせよ、ここに汲み取られる被配流者・乙麻呂の「心」が、元興寺僧の自嘆、さらには故豊嶋采女の悲哀に重なり合うだろうというのが小稿の見通しである。

#### 四 人に知らえず

十年戊寅元興寺之僧自嘆歌一首

白玉は人に知らえず知らずともよし 知らずとも我し  
知れらば知らずともよし (6・1018)

右一首或云 元興寺之僧獨覺多智 未有顯聞

衆諸狎侮 因此僧作此歌自嘆身才也

前記したとおり、ひとりの僧が身の才を誇りつつも世間に知られぬことを「自嘆」するつぶやきが天平十年に限定的に結びつく必然性には思い至らない。そもそも一回かぎ



りの「自嘆」などあるはずがなく、低徊して出口を見ない思念が右なのであり、「知らえず」「知らずとも」「知らずとも」「知れらば」「知らずとも」の堂々巡りがその低徊を如実にあらわしている。

もつとも、松本信道氏は、「天平十年」「元興寺僧」「自嘆」「白珠」「独覚」「多智」の六つをキーワードにそれらすべての条件を満たしうる人物を推考し、早く寺崎修一氏が、

万葉集第六巻の天平十年（時に智光三十歳）元興寺之僧自嘆の歌（中略）の一首は、茲に借りて以て、智光の心情を巧に描出し得ると思ふ。<sup>15</sup>

と述べたところを敷衍して、一首の詠作者（元興寺之僧）に適合する人物に智光を提案した。

「天平十年」の前後の歴史的状况をみると、元昉の僧正直任とそれに反発した道慈の律師辞任ということがあり、それらがこの歌の題詞と左注の背景にあり、世俗的榮達を追及する元昉と「独覚」・「多智」を理想とする元興寺の智光との対立が、この歌および題詞と左注に反映しているのではないか<sup>16</sup>。

松本論に先立って佐竹真由美氏は、左注中の「独覚」「多智」につき仏典用例の詳密な検討からその意義を確定し、当該「元興寺之僧」の人間像を次のように浮かびあが

らせる。

奈良の元興寺内で学問修行に明け暮れている限り不可能と思われる「独覚」の環境も、ひとたび吉野の山中に入れば、飛花落葉、十二因縁を観ずるには絶好の「独覚」的環境であつた。吉野比蘇山を別所とする元興寺の僧に「独覚」を称する者がいたとしても決して不思議ではない。∴（中略）∴「独覚」にして「多智」であつたという元興寺の僧は、彼が山林修行と寺内での正法研学と、その両方を兼修した結果の成果だつたと考える。定めて彼は、智においても、行においても、余人に引けを取らない自信に満ちていたに相違ない。<sup>16</sup>

ただし佐竹氏は当該歌左注を「歌の方から派生した異説」と解し、本来は仏教的背景を持たない民間伝承の旋頭歌であつたものに、いつしか「独覚」の意義を付与して、「不遇孤高の「独覚」僧たちの口ずさみとして、元興寺のなかで愛唱されるようになっていた」のだろうと述べた。そしてそれが天平十年と結合したについては、続日本紀天平十年閏七月条、

乙巳、以行達法師・栄弁法師為少僧都。行信法師為律師。

の記事を参照し、元興寺の高僧・行信の出世が当該歌をこ

の年の詠として位置づける契機だったのではないかと推測している。

いずれも示唆に富む論である。「独覚」「多智」を兼備した僧侶の風貌は佐竹氏の説くとおりであろうし、仏教者の「自嘆」が当時の元興寺内で愛唱されていた可能性は考慮されてよい。松本氏が「独覚」を、大乘的な菩薩（衆生救済・社会事業・行動的な菩薩僧＝行基）と対比されるところの小乗的な営み（寺院に寂居して学問研究に専念＝智光）であると把握したのもまた興味深い見解だ。

しかしながら、「天平十年」の事実性を過大視して「元興寺之僧」に智光や行信など高名な僧を代入するのは適切でない。日本霊異記中巻第七縁などを想起しつつ読者が智光の影をここに垣間見るのは自由だが、それでは題詞に「元興寺之僧」と記した萬葉集の意図を読み取ったことになるまい。天平年間の元興寺にそのような「自嘆」する僧侶が存在したことを佐竹氏の論によつて確かめておけば十分である。一首は、「多智」でありながらいまだ「顕聞」のない、つまり自己評価と第三者評価とがバランスしない無名の僧侶による独白と受け取るべきなのであり、循環する思考から抜け出せないからこそ、自ら問いかけ自ら答えるに相應しい旋頭歌体が採用されたものと納得される。歴史的社会的現実と整合するかどうかは別にして、萬

葉集巻六が証言しているのは、不遇を託つ僧侶が天平十年の元興寺に存在した、ということであり、それ以上の裏取りを要求してはいない。

さて、八月二十日右大臣橘諸兄宅において誦詠された豊嶋采女歌にも「人に知らえず」の嘆きが吐露されていたのだった。

#### 秋八月廿日宴右大臣橘家歌四首

長門なる沖つ借島奥まへて我が思ふ君は千歳にもがも  
(6・1024)

#### 右一首長門守巨曾倍對馬朝臣

奥まへて我を思へる我が背子は千歳五百歳ありこせぬ  
かも (6・1025)

#### 右一首右大臣和歌

もししきの大宮人は今日もかも暇をなみと里に出でざ  
らむ (6・1026)

#### 右一首右大臣傳云 故豊嶋采女歌

橘の本に道踏む八ちまたに物をそ思ふ人に知らえず  
(6・1027)

右一首右大辨高橋安麻呂卿語云 故豊嶋采女之作也 但或本云 三方沙弥戀妻苑臣作歌 然則豊嶋采女當時當所口吟此歌歟

主客による常套的な挨拶に続いて主人諸兄および高橋安麻



呂が豊嶋采女作歌と伝える詠を伝読したという記録である。豊嶋采女に対しては揃って「故」字を付しているので、宴席開催時にこの女性は故人だったのだろう。単にその詠歌を披露するためだけであれば故人であることの表示は不要のはずで、あえてそれを付記したのは、当日の宴で豊嶋采女に由来する二首を享受するのに必須の情報だったからと考えられる。この点については旧稿に次のように結論した。

確かなことは豊嶋采女が故人であり、諸兄はじめ宴席構成者はそのすでに世にない采女の詠歌を享受しているという点である。つまりは豊嶋采女が死去したことで詠歌誦詠の意義を獲得したということだ。四首を一括りとして編集・提示する意図の中心に豊嶋采女歌があることも動くまい。そこまですを確認した上で本論は、豊嶋采女が恋の詠を残しつつも采女の立場ゆえにその恋を全うすることなく死を迎えたものと推測し、采女への同情や共感を宴席の場面に諸兄・安麻呂が続いて話題提供したものという把握を試みた<sup>11</sup>。

恋愛の自由を与えられていない采女が「大宮人」に思いを寄せたとき、「人に知らえ」ぬ懊悩を味わうのは不可避だ。その恋を遂げられず死去した采女の身の上に同情し哀れむというのが当日の宴席（のある時間帯）の趣きだったのだろう。巻八・一五七四〜一五八〇歌と同日の宴でありなが

ら右四首をそれと分断して巻六に編集した事情については、主客間に交わされた唱和が互いに「奥まへて思ふ」内面を主題とするものであり、その抑制した心情と豊嶋采女歌の描き出す忍ぶ恋とが接点を結ぶからであると旧稿に推論した。

現時点で右を更新する準備はないが、当該四首を巻六のこの位置に定位する意味に触れることがなかったのは遺漏であつた。叙上を踏まえその点を再考するなら、どうしても采女による「人に知らえず」の嗟歎表出を注視しなければならぬ。同年の詠出として処遇される元興寺僧歌と豊嶋采女歌とにまったく同じ表現が出現していることをたゞの偶合と退けるのは不自然であり、両者が同一の言辞をもって自身の境遇を悲嘆している点に編集上の関心が向けられたのではなかったか。僧侶の不遇と采女の不遇、両者はもとより直接の交渉を持たないし、抱かれている心情の實質も大きく食い違っているけれども、一方は平城京元興寺において、他方は宮中において、奇しくもともに「人に知らえ」ぬ自身の身の上を述懐しているという点で二つの歌群は連繫するのである。

そのように見るとき、石上乙麻呂の境遇もまた配地土左にあつて人に知られぬ懊悩の日々を送っていたことが思い合わされてよいだろう。A〜Dに描き出される乙麻呂の内

面が元興寺僧・豊嶋采女両者に抱かれているそれと疎遠でないことは誰にも了解されるはずだ。三者の内面を公約数的にまとめるとすると、当人の人格や才覚・美質に照らして、本来そうあるべきでない状態に強制的に置かれた者の苦悩、ということになるうか。かくして、身の不遇を託つ僧侶の歌、遠国に配流された不遇の高官乙麻呂関係歌、身分と立場ゆえに恋を全うすることができず死去した薄幸の采女の歌、が順に並ぶ次第となり、その配列に巻六・天平十年の鮮やかな歴史認識を見届けることができると思う。天平十年はまさに「不遇」の時間としての評価を付与されているのである。

天平五年に月の歌と親族間の宴席歌とが執拗に続く様相を思い起こしたい。天平五年から六年にかけての時期を皇都の最高潮と振り返るのが萬葉集巻六の歴史認識であったのだとみるなら、それとは対照的な傾向をもつ詠歌を連続させる天平十年は、平城京都市民が諸処で不遇を託つ、翳りの見えはじめる時期、ということになるのだらう。もとよりその裏付けを正史に求める意味はなく、またこの翳りを歴史的事実と受け止める必要もなく、あくまで萬葉集巻六が独自にそうした評価を下しているということだ。村瀬憲夫氏は巻六巻末部に展開する歌々に即して「うつろひと無常の自覚」と「をちかへりと永遠への願い」とを共通主

題に析出したが<sup>18</sup>、そうした思想性や世界観が天平十年の配列にも少なからず関与していることを認めたい。

### むすび

石上乙麻呂の配流事件について正史と萬葉集との間に齟齬を生じていたのだったけれども、上記の理解に立つならば、それはけっして編纂者の不見識による誤認・思い違いではなくて、巻六の歴史認識に基づく意図的な操作であったと把握するべきであらう。その営為は、各種の情報を公平に見比べられるわれわれにとっては著しく不当なことに映るかもしれないが、時を遡って再構築される「歴史」とは宿命的にそうしたものであつて、萬葉集は正史参照の義務を享受者に要請してはいない。「流行語大賞」や「今年の漢字」がやがてその一年を象徴してしまうように、記録され定着した言辞だけがその時間帯の本質のごとく登録され、他の情報を排除することも珍しくない。天平十年が「歴史」のひとつの画期であるための根拠に、乙麻呂の土左配流をこの年の出来事として固定することが求められたのである。

ところで、乙麻呂歌群には、流されゆく自らの身の上を憂うCDに前置して、家人による悲嘆Bと時の人の哀訴Aとが配されていた。自嘆する僧侶と采女、そして乙麻呂の

「人に知らえ」ぬ孤独な物思いを提示するにあたり、ここに「時の人」の介在があることの意味は小さくない。当事者と対話の回路が結ばない第三者の設定により前後の円滑な融合が実現しているのだとすると、天平十年の全体が巧みにデザインされていることを思わずにいられない。このあたりをいいますこし追究することで、扱いにくい乙麻呂歌群解析に接近する糸口があるのではないかと考えている。

## 注

- (1) 引用に際して歌文の訓読・表記等は『年表』のそれを適宜改めたが、歌の前に付された×印は原著のまま。
- (2) 五味智英「乙麻呂・若壳配流の事情(一)」(『アララギ』六十巻三号、昭和42年3月)
- (3) 吉井厳氏「萬葉集全注巻第六」(有斐閣、昭和59年)所収「万葉集巻第六概説」による。なお、同趣旨の主張が吉井氏「萬葉集巻六について―題詞を中心とした考察―」(『萬葉集への視角』和泉書院、平成2年/初出は昭和56年)にも展開されている。
- (4) 渡瀬昌忠氏「石上乙麻呂土佐国に配さるる時の歌」(『万葉集を学ぶ』第四集、有斐閣、昭和53年)
- (5) 吉井氏注(3)の著。
- (6) 神野志隆光氏「『万葉集』の「歴史」世界―巻六をめぐる―」(『萬葉』第二百十四号、平成25年3月)
- (7) 市瀬雅之氏「編纂者への視点―巻六の場合―」(『大伴家持論―文学と氏族伝承―』おうふう、平成9年)は吉井論の提

起を肯定しつつも巻六の構想の中心があくまで聖武天皇にあることを述べて抑制的修正を求める。

- (8) 伊藤博氏「歌語りの方法」(『萬葉集の表現と方法 上』塙書房、昭和50年)
- (9) 小島憲之氏「口頭より記載へ」(『上代日本文学と中国文学中』塙書房、昭和39年)
- (10) 中西進氏「詩人・文人」(『中西進万葉論集第一巻 万葉集の比較文学的研究(上)』、講談社、平成7年/初出は昭和37年)
- (11) 渡瀬氏注(4)の論
- (12) 村瀬憲夫氏「石上乙麻呂土左配流歌群の成り立ち」(『紀伊万葉の研究』和泉書院、平成7年、初出は昭和63年)
- (13) 「大崎」を海草郡下津町大崎に求めるのは中山厳水の言を引く『萬葉集古義』に始まり、加太・田倉崎をあてるのは吉井厳氏の見解(「大崎の神の子浜」『萬葉集への視角』前掲)。最近、村瀬憲夫氏は乙麻呂が紀伊国を経て土左に向かうルートを重視してこの問題を検討し、「大崎」の比定地としては旧説が穩当であること、D歌に「大崎」を通過する無念がうたわれるのは乙麻呂一行が「紀の川の水運(船運)」を利用して和歌の浦に至り、そこから土佐に向けて出港したためであること、を指摘している。「万葉集・石上乙麻呂の土佐配流歌群の「大崎」―聖武天皇紀伊国行幸の道筋の想定にも及ぶ―」(『和歌山地方史研究』第66号、平成26年11月)。
- (14) 寺崎修一氏「元興寺智光の事ども」(『現代仏教』第六巻、昭和4年6月)
- (15) 松本信道氏「『万葉集』巻六所載「元興寺之僧自嘆歌」の成立の背景」(『仏教文学研究』第九号、平成18年9月)

- (16) 佐竹真由美氏「元興寺之僧自嘆歌一首」(『成城国文学』第五号、平成元年3月)。同論は「独覺」について阿毘達磨俱舍論ほかに拠りつつ「或いは十二因縁を觀じ、或いは飛花落葉など天地自然の理に触れ、師の教え無くして独り覺る者」の意であるとし、「多智」とは「無智」の反対概念で、仏教では「七正法」の一つである」とする。
- (17) 影山尚之「豊嶋采女の恋の歌―右大臣橘家四首宴席歌考―」(『萬葉和歌の表現空間』塙書房、平成21年)
- (18) 村瀬憲夫氏「卷六卷末部編纂の構想―卷六の現態の読解を通して卷六編者の想定に及ぶ―」(『萬葉集編纂構想論』笠間書院、平成26年)